“表現”の独り歩きと書への誤解

木下：ところで、第二次大戦後、抑圧から個が解放されて、より自由なものを求めるという気運があって。
1950 年代に西洋の“抽象芸術”、“アクション・ペインティング”とリンクしながら、海外で脚光を浴びた、森田子龍（もりたしりゅう）などによる「前衛書」と呼ばれるものも出てきましたよね。
その流れで言えば、篠田桃紅（しのだとうこう）や井上有一なども海外で評価を受けましたが。

島谷：前衛書は、絵画に近いですよね。

木下：前衛書を書いている人は、特に線質にこだわっているわけですが。

島谷：ええ。ただ、絵画の人も、線にこだわって絵を描いている人はいるわけです。

木下：前衛書の全てがそうではありませんが、“文字”そのものから離れてしまうものは、やはり“書”とは言えないのではないかと、個人的には思います。

それから、これはここ十年くらいのことになりますが、メディアでいろいろなタイプの書家が取り上げられるようになりました。

こうした状況は、おそらく硬筆どころか手書きという行為すら衰退してしまった時代の反動だと思うのですが、筆と墨と紙を使って書いていれば、誰もが書家であるとも思われています。

一般的に、書の本質が見失われていて、気軽な自己表現のツールと捉えられていたり、メディアの広告などでは、筆文字が単なるデフォルメ的な“効果”として使われている面もあります。

島谷：筆で書く、筆で書かれたものを目にする機会が増えるということにおいては、いいことだと思うんですよね。

でも、“伝統”を踏まえていない書というのは、あり得ませんので。

木下：書芸術にしても、クリエイティヴであればそれでいいというものではなくて、やっぱり、先人たちが培ってきた書文化に立脚していることが大切ですよね。
そうでなければ、それには書の本来の魅力が備わっていないということになってしまいます。

また書作においては、主観的な主張だけで書くことでも、客観的な判断だけで書くことでもなくて。結局、書は、自我というものをどう扱うのかということにかかっていると思うんです。

書作において自制心の扱いを意識すれば、書の本質は取り戻せる

日経ビジネス「和道　日本文化 心のしきたり　美のこだわり」書道編 vol.5 より